2025年度　指定校推薦　小論文問題

次の文章を読み、問いに答えなさい。

関係が深まらない「コミュニケーション阻害語（そがいご）」

他者との関係を深めるにあたって、自分が他者に対して「受身の立場」をとれるということも大事です。受身の立場とは何かというと、相手が自分に働きかけてくれることに対して、それなりにきちんとレスポンスできるということです。

それは、決して100パーセント相手に合わせることではないし、100パーセント丸ごと受容できないからといって親しさがないということではありません。違うところは違ってもいいのです。

でも、なるべくいろいろな人の言葉に耳を傾けるということが、関係作りのバランスを鍛えるいいトレーニングになると思います。

しかし、とりわけ若い方がふだん何気なく使っている言葉（しかも使用頻度がかなり高いと思われる）に、きちんとした受身のレスポンスをとることをいつのまにか阻害する働きをしてしまう言葉があります。

そのことに気づいたのにはこんなきっかけがありました。私の娘が小学校の中学年ぐらいになったときに、「ムカツク」とか「うざい」といったたぐいの言葉をよく使うようになりました。そのあたりから、友だちへのまなざしがどうもよくない、友だちをマイナスの面から見ることが多くなり、家族やまわりの人たちへのギスギスした態度が目についてきました。そこで、そうした言葉を使わないようにとアドバイスしてみました。その言葉にはいくつかあって、私はそれらをとりわけ子どもたちにとっての「コミュニケーション阻害語」と名づけて、気にかけるようになりました。

子どもから大人になるプロセスにある10代は、その人が他者とコミュニケーションを取り交わす作法を学び取る大切な時期です。私たちは他者である相手と言葉を交わすことによって、情報内容の伝達だけではなく、思いや感情といった情緒的側面の交感をも重ねます。そうしたコミュニケーションの過程のなかで、自分から相手をまなざすと同時に、相手から自分に向けられるまなざしを受け止めながら、〈いま・ここ〉の自分のあり方を振り返り、とらえ直す作法を学び取ります。

しかし、私が「コミュニケーション阻害語」と名づけた一連の言葉は、そうした自分と相手の双方向のまなざしが自分自身のなかで交差することを、著しく阻害する危険性があると思うのです。自分から相手を一方的にまなざすばかりで、相手からのまなざしを回避してしまう道具としての性格を、こうした言葉はいつのまにか帯びてしまっているというのが、私の考えです。

もちろん私は、「こうした言葉を用いることを一律に禁止せよ」、といっているわけではありません。大人になって、状況判断や相手との間合いの取り方などに長けてくれば、時と場合によっては、冗談半分で使うこともあるでしょう。でも他者とのコミュニケーションの作法をこれから学び取り、状況に応じた相手との距離の感覚やきちんとした向き合い方を身につけていかなければならない10代の若者たちにとって、これらの言葉群は、異質な他者ときちんと向き合うことから自分を遠ざける、いわば〈逃げのアイテム〉としての機能をもち、そうした言葉を多用することによって、知らず知らずのうちに他者が帯びる異質性に最初から背を向けてしまうような身体性を作ってしまう危険性があることを、私は指摘したいと思います。

出典：菅野仁『友だち幻想　人と人の〈つながり〉を考える』、ちくまプリマー新書、2008年。
出題のため一部改変。

問1　本文を要約しなさい。（300字以内）

問2　コミュニケーションの作法を学び取るためには、どのような取り組み（行動、心構え）を行えばよいか、自身の考えを述べなさい。（500字以内）

以　上